堕罪　～Ｃｏｒｒｕｐｔｉｏｎ～

雪場

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
堕罪　～Ｃｏｒｒｕｐｔｉｏｎ～

【Ｎコード】
Ｎ７３１８Ａ

【作者名】
雪場

【あらすじ】
小さなミスが命取りになるぐらい、彼女には痛いほど分かっているはずだった。それでも犯してしまった、時間にすればわずか数十秒の、些細な忘我。絡みついた組織という狡猾な蜘蛛の糸は、もがけばもがくほどしっかりと彼女を捕らえていって…。底知れぬ『堕』の先に彼女を待っている運命は…？

序幕　プロローグ

静かな舞台の上、ライトが照らし出したのは一人の少女。

彼女は、泣いていました。

冷たい床に座り込んで、赤みがかった綺麗な髪を、華奢な肩の上で震わせて。

何度も、何度もしゃくりあげ、その度に、彼の服をぎゅっと強く握り締めて。

頬を伝った涙が、ゆっくりと彼の服に吸い込まれてゆく。

そう、彼女が泣いているのは、愛しい彼の腕の中。

微動だにしない彼の胸に、その可憐な顔をうずめたまま。

一緒に泣くことも、励ますこともなく、黙ったままの彼。

その彼の腕の中で、少女は泣き続けました。

劇のエンドを飾るのは、華奢な彼女の手に握られている、鈍く光る拳銃。

数日前に手にした、彼女に似つかわしくないそれは、６発装填のスミス＆ウェッソン。

小道具は、床に転がった一個の空薬莢。

そして、冷たい床に押し付けられた、まだ熱い銃口。

自身の存在を示すかのように、淡い煙が微かに立ち上る。

硝煙の匂いが二人を包む。
声にならない嗚咽が、時折小さな口から漏れる。

電気の消えた室内を、夕日が長い影を作りながら紅く染めてゆく。
二人は、黄昏に染まった後もその場に留まり続けた。

最後の舞台は、米花町２丁目２２番地。
ヒロインの名は、灰原哀。
そして、もう一人のキャストは、江戸川コナン。

…最後まで、気づくことができなかった主人公。

舞台の幕開けは、さかのぼること数週間前。
その日が来るまでは、平穏だった日々。

…でも、一度狂った歯車は、最後まで止まることなく回り続けて…。
…気がついたときには、もう手のつけられないうねりとなり、周りを巻き込んでいた。

始まりは、ほんの些細な出来心。
そう、ほんの些細な……。

序幕　プロローグ（後書き）

ども、雪場です。期末テストから開放されて、ようやく投稿、と言った感じです。

今年は学園祭の準備やら夏期講習やらで忙しくなりそうですが、もちろん執筆のほうも本格的始動の夏になりそうです。それにしても暑い…クーラーも必須になりそうです。あ、でも今はまだ扇風機で我慢。夏休みに入るまでは、と自分に言い聞かせてますが（笑）

さて、今回は配色どおり、ちょっとダークに挑戦。

私のことですから、当然至らない点も多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いします。

第一幕　白亜の建物

その日、灰原は博士に頼まれて、杯戸町へ買い物に来ていた。
買い物を無事に済ませ、大きな白いビニル袋をぶら下げて帰路を行く。
角を曲がったとき、不意に足が止まる。
彼女の目に飛び込んできたのは、真っ黒なセダン。
でも、彼女の足を止めた本当の理由は、別にあった。
「この感じ…」
思わず身震いするほどの冷たい感覚が体を貫く。
本能的に、感じ取っていた—「組織」が近くにいることを—
放心状態からようやく我に返ると、急いで塀の陰に身を隠す。
幸い、セダンに乗っている人物は、灰原には気づかなかったようだ。
しばらく停車していた後に、ごくゆっくりと動き出した。
灰原も、思わず塀の陰から顔を出して、車の動きを目で追った。
セダンは数十メートル進み、大きな建物の地下駐車場へと消えていった。
「確かに…入っていった…」
今まで追っていた組織の手がかりが、今、目の前にあった。
組織に近づくことを、最高にタブー視している灰原。
だが、なぜかこのときは、手掛りを胸のうちにしまってコナンの元へ行こうとはしなかった。
「……」

怒りにも似た色を浮かべ、厳しい目線で先の建物を睨む。
静かに、建物へ向かって歩き出した。
どんな結末が、その先で待ち受けているかなど考えもせずに…。

道の反対側に立って、今車が消えていった建物を見上げる。
まぶしい日差しを浴びて、白亜に輝くその建物は、
圧し掛かってくる重圧感があり、どこか無機質で冷たい感じでもある。
余計な装飾を抑え、窓も小さい簡素な作り。
あの窓の向こうにいる人物を想像すると…さっと戦慄が走る。

それと同時に厳しかった目に一瞬驚きの色が浮かぶ。
「なんで私、こんなところにいるの…」
組織らしき車が入っていった建物。だが、一人で一体何ができるだろう。
しかも、今彼女は建物の目の前に立っている…。
いつ何時、向こうから発見されるか分からないのに…。
心臓が、早い鼓動で胸を打つ。

慌てて買い物袋を持ち上げると、小走りに路地裏へと消えた。

灰原が見ていないところで、今まで静かだったシャッターが上がる。
中から一台の車がゆっくりと現れ、彼女の後を追うようにエンジン音を響かせた。

第一幕　白亜の建物（後書き）

この『堕罪～』のほかにも水面下で駄作を書き散らしてるんですが、哀ｏｒ志保系統が多いことにふと気づきました。個人的には平×和も書きたいのに…なぜかそこだけアイデアが出ない（爆）
アイデア→キャラ決定（新蘭等）の流れじゃないと書けないので、アイデアがないと手も足も出ない（笑）雪場でした。

追伸：今後は2～3日間隔で投稿していきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

第二幕　青いボールペン

「相変わらず、博士は交友関係が広いわね」
杯戸町での出来事があった次の日の朝。
いつの間にか、朝の郵便受けをチェックするのは灰原の仕事になっていて、
その日も半ば呆れ気味に、博士に来た幾つかの封筒をぼんやりと裏返していた。
博士の発明仲間からの手紙、銀行からのお知らせ…。

ふと、灰原の手が止まる。
大型電気店の広告と、的外れな塾の勧誘の間に、切手のない封筒が一つあった。
手に取ってみると、差出人の名前も、住所もない。
宛名の欄には、アンバランスにたった一言。

――　灰原　哀さま　――

青のボールペンで書いた、不自然なほどに直線的な字。
その字を見た瞬間、なぜだか分からないけれども、
心臓が締め付けられてキュッと小さくなるのを感じた。

博士には隠したまま、その封筒を抱えて地下室へと走る。
後ろでバタンと重い音を立ててドアが閉まるのを聞いて、そばにあった椅子に座る。
大きく深呼吸をする。

じっと白い封筒を見つめた後に、思い切って鋏を取り上げた。
興奮で震える手を抑えながら、真っ直ぐに封を切った。
薄く青い線が横に入った、一枚の便箋。
三つ折りになったその紙を、ゆっくりと開ける。
整然と並んでいたのは、宛名と同じ青いボールペンで書かれた、小さく几帳面な字。
…それでいて、妙に子供っぽい字。

やっと見つけたよ、シェリー

その一行を見ただけで、
心臓が血液を送り出すのを止めたように感じられ、一気に手足の感覚が薄れる。
気を失わないでいるのが不思議だった。

翌日の昼下がり、灰原は一人で家にいた。
手紙で指示されたとおりに、口実を作って博士を昼の間、家から遠ざけた。

…人のいい博士を騙すのは、そして何の疑いもなく家を出て行く博士を見るのは、
表情には出さなくても、鉛のような、沈んだ気持ちにさせた。

だけれども、選択する権利はなかった。
手紙と一緒に入っていた、何枚かの写真。
灰原のだけでなく、博士や、歩美、元太、光彦も含まれていた。
後を追って、居場所を突き止めてから、しばらく監視していたのだろう。

写真が意味するものは…たった一つ。
組織にいた灰原には言うまでもなく、痛いほど分かる。
コナンの写真は同封されていなかったが、大して慰めにもならなかった。
一瞬の軽率な行動のせいで、今まで守り抜いてきたものが、崩れ去る。
それも、何も知らない子供たちを巻き込んだ、最悪の形で…。
電気の消えた室内で、うつむいたまま、一人椅子に座り続けている。
「もしみんなが助かるのなら…こんな私の命ぐらい…」
静寂を切り裂いて、玄関のチャイムが鳴った。

第二幕　青いボールペン（後書き）

第2幕終了です。読んでくださった皆さん、どうもありがとうございます。
どうして青いボールペンなのかといいますと…去年イギリスに留学していたときに、話には聞いていたけれど、本当にあっちでは生徒が全員、青のボールペンでノートを取っていてちょっと驚いた経験をふと思い出したから。特に大事な意味はないんですけどね（笑）
まあ国際的な組織ですから、使う道具もグローバルに（笑）

第三幕　黒い猫

沈黙を破る、調子はずれな電子音。

来るべきものが来た、そんな思いで静かに席を立った。
いつもより広く感じる玄関で、一瞬足が止まる。
小さく息を吐いた。
覚悟を決めたようにゆっくりと目蓋を上げると、ドアノブに手をかけた。

…もう、終わりね…

ドアを開ける。
眩しい午後の日差しが、開いた隙間から一筋の光となって灰原を照らす。
逆光の中に、一人のシルエットが浮かび上がる。

「阿笠さん、お届け物で～す」

「えっ？」
立っていたのは、茶色の小包を抱え、緑色の制服を着た…宅配便の人。

「お嬢ちゃん、はんこ、お願いできるかな？」

「はんこ…ね」

気を取り直して、目の前に置かれた小包を見つめる。

『取扱注意』の札と、割れたグラスの絵が貼られた箱。
開く前に、耳を当ててみる。
…時計の音はしない…。
時限式でなくても、光反応式やらいろいろ考えられたけど、
「その気になれば、夜のうちにこの家ごと木端微塵にすることだってできるのよね」
そう呟いて、かまわず開くことに決めた。
ガムテープを剥がすと、中から白い包装紙に包まれた何かが出てくる。
丁寧に、包み紙を開いていく。
その白い紙の下から顔をのぞかせたのは、黒猫の置物。
背中に貼られたメモ用紙には、

サイドテーブルの上、電話の横に

小さな青い字で書かれていた。
そのメモ用紙を剥がして、ゴミ箱に捨てる。
小さくはない置物を、両手で持ち上げてみる。
思っていたよりも重かった。
「…盗聴器…？」
間違いない。

不釣合いに大きい台座。
よく見ると、小さな穴が幾つか開けられている。
その黒猫を、そっと床におろす。

何も言わないまま、寂しげな目で木の床に座った黒猫を見つめる。

こんなものを、誰にも言わずに、ここに置いて良い訳がない。
もっと…多くの人が、消される危険に陥れられる…。
そして、その行為は、今まで一緒にいた、工藤君らへの裏切り…。

でも…。
私はどうなっても構わない…元々私はここにいるべきではない存在だったのだから。
ただ…ここに置かなければ…博士や円谷君たちが…。

思い出されるのは、全ての始まりを告げた手紙。
その最後3行。

誰にも言わず、シェリーがちゃんと言うことを聞いてくれたら、
余計な人の口を塞ぐのは我慢してあげるよ。
だって、シェリーは僕等にとって、必要な人だもん。

破滅の運命を、一瞬だけ長引かせるだけかもしれない。
単なる甘えなのかもしれない。

堕落を誘う、甘美な果実。

それでも私は…、もう大切な人が、死ぬのを見たくない…。

ねえ、一体…どうすればいいの…？

つぶることなく開かれたままの瞳から、はらりと涙が零れ落ちた。

第三幕　黒い猫（後書き）

どうにか話も４話（第三幕）に突入、私もどうにか夏休みに突入（笑）
置物、別に黒猫である必要は無いんですけどね、書いてるときにたまたま聴いてたバンプの「K」という曲の歌詞に出る「黒猫」ということに。
あとは…強いて言えば灰原さんって、「猫」的なイメージありませんか？（笑）
どうもここまで読んでくださって、ありがとうございます。

第四幕　真っ赤な仮病

「哀君、気分はどうじゃ？」
心配げに覗き込む博士の顔。
「ええ、だいぶ良いみたい」

口ではそう言いつつも、布団をかぶって壁のほうを向く。
機嫌が悪いわけではなく、博士の顔が見ることができなかったから。

背中越しに、博士が立ち去る足音を聞いて、ベッドの上からリビングの方へ目を向ける。

サイドテーブルの上、電話の辺りを、静かな中に燃えるものを秘めた目で睨む。
その視線の先には、黒猫が鎮座していた。

結局、言われるままにそこに置いてしまった…。
そんな自責の念と後悔に、「これ以上みんなと一緒にいないほうが良い」という口実も加勢し、平日の昼を過ぎた今でも、こうしてベッドに横になっている。

別に悪いところもないのに、仮病で一日中横になっている。
そんな行為に加えて、ここ数日の出来事。
本当に頭が痛くなってくるような感じがしてくる。

「もうそろそろ夕方かしら…」
頭の上にある時計を取ろうと手を伸ばしたとき、

――ピンポーン

また響いたのは、乾いた電子音。

博士が慌てて玄関へ行く足音。

そして、聞こえたのは、

「なあ博士、灰原、いるか？」

彼の声。

「上がるぞ～」

…だめ…。こっちへ来ちゃ…。

人の心配もよそに、ずかずかと入ってきた彼は、ベッド横にどっかりと腰を下ろした。

「本当に体調悪いのか？オメーの事だから、てっきり仮病かと思ったぜ」

「余計なお世話よ。それより…用が無いんだったら、早いとこ出て行ってくれない？」

冷たく言い放ちながらも、心の中では祈る思い。

「そっと…しておいてもらいたいから」

少し困ったような表情をした彼だったけど、すぐにいつもの眩しい笑顔を浮かべると、

「わーったよ。帰りゃいいんだろ、帰りゃ」

立ち上がって、灰原に背を向け、居間へと戻る。

そう…そのまま…帰って…

リビングで、彼は足を止めた。
「博士～、今度また家の掃除手伝ってくれよな。この体じゃ一人でできねーし、蘭たちにはこの前やってもらったばっかりだし」

えっ…。まずいわ…

「ああ新一、分かっておる。どうせ隣じゃし、哀君も手伝ってくれるじゃろうし」

『新一』
その何気なく発せられた言葉が、灰原に回復不可にも思える打撃を与え、

また目の前が暗くなる。

これで…完全に工藤君のこともばれたわね…
自分があれを置いたばっかりに…。

熱にうかされたように、独りベッドの上で額に手の甲を当てた。

第四幕　真っ赤な仮病（後書き）

ここまで駄文にお付き合いいただき、どうもありがとうございます。今回で初めてコナンの台詞が出てきました。今まで灰原中心で話を進めてきたつもりでしたが、宅配便の人以外に発言した人がいなかったとは…自分でもびっくりです（おい）

他人との会話無しで話が成立してしまうのも、彼女中心の話ならではだと思います。

なんか分けわかんないこと言ってますが、気にせず聞き流してください（笑）

それでは、また二日後に投稿するつもりです。できれば読んでやってください。

第五幕　S&W

もう手のつけられなくなった歯車は、勢いよく回りだした。
あの次の日にまず届いたのは、携帯電話。
…一方通行の、指示を示すためだけの道具。

その日の午後に掛かってきた第一声。
『シェリーだけじゃなく、工藤新一も小さくなってたんだ。
…これは面白いことになりそうだね。楽しみだよ』

機械を通して変えられた声。
不自然な高さの声が、妙に空恐ろしく聞こえた。

指示されるまま、その翌日は一日中家を空け、
その後も、唯々諾々と従うほか無かった。

新一や、ＦＢＩの情報も、全て教えるように迫られた。
少しでも躊躇すると、すぐに警告がやってくる。
言葉ではなく…何らかの形で。
元太たちの目の前で、ゴミ箱が爆発したこともあった。
追い詰められた彼女に残された道は、全てを話すことだけ。

気がつけば、もう…どうすることもできないところまで来ていた。
それでも、彼女はまだ、最初の手紙にまだ一途の望みを抱いていた。

…ちゃんと言うことを聞いてくれたら、
余計な人の口を塞ぐのは我慢してあげるよ…

何も知らず、優しく接するみんなの顔を、真っ直ぐに見ることができなくなっても、
そのあまりにも頼りない一筋の糸にすがり付いて…。
再びその手を、真っ黒な罪で染め上げて…。

一体後どれだけ、こうしていればいいの…？

自分のベッドに横になり、真っ暗な天井を見つめて呟いたとき、
呼応するように携帯電話が鳴った。

「…何…？」

『こんばんは、シェリー。やっと…決まったよ。
シェリーが組織に戻って、あの薬の開発を再開する。それが条件』

「えっ…それだけ…？」

『ただし、もう一つ条件があって…。昨日届いた荷物、開けてみてよ』

もう寝静まった博士を起こさないように気をつけながら、静かに階段を降りる。
部屋の隅に置いたままになっていた小包を手にとる。

ゆっくりと包装紙を剥がし、蓋を持ち上げる。

中身は、

月明かりを反射して、黒光りする…
…拳銃。
『それで工藤新一を撃つんだよ、シェリー』

何も言わなくなった携帯電話とスミス&ウェッソンの前に、灰原はずっと座り込んだまま。
時折微かに梟の鳴き声が聞こえてくる他は、全く静かな夜。
蒼白い月の光に照らされたまま、うつむいて石の様に座り続けていた彼女は、
夜が明け、博士の部屋から物音がし始めると、ようやく二階へと静かに上がっていく。
…Ｔｏ　ｂｅ　，ｏｒ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｂｅ…
覚悟は、できていた。

第五幕　S&W（後書き）

まず最初に。スミス&ウェッソンは、一応設定上S&W　M19（Smith&Wesson　Model　19）。ルパン三世に登場する、ご存知次元大介の愛銃です。当初オートマのコルト・ガバメント（鎮魂歌にも出てきましたし）の予定でしたが、諸事情により変更…しましたが、どうでもいいことです（苦笑）
話の中で銃を使うときは、とりあえずネットで画像を探して、イメージに合うのを見つけてから書き始めるという、習性を持った雪場でした。
次回も読んでいただけると幸いです。それでは。

第六幕　金網越しの夕焼け

十二時五十分。ほとんどの生徒は校庭に出て遊ぶ時間。
そのせいか、昼休みの教室には、灰原とコナンしかいなかった。
机に腰掛けて遠くを見ているコナンとは対照的に、一心に何かを書き留めている灰原。
そのうちに、書き終わったのか、灰原がペンを置くと、顔を挙げた。

「悪いわね、待たせて」
なんでもねえよ、と軽く目を向けて、コナンは机からぴょんと飛び降りる。
「んで？言いたい事っつーのは？」

「ここでは言えないわ。だから…」

彼の傍によって、一段と声を落とす。
「五時、ちょうどに…学校の屋上でね」

呼び止めようとする彼の横をすり抜けると、教室から出て行った。

最後に、愛しさを込めた、寂しい一瞥を彼に投げかけて。

四時三十分、左手にはめた腕時計でそれを確認すると、ゆっくりと家を出た。
博士や、住み慣れた博士の家に名残を惜しむように、あくまでゆっくりと。

「失う直前にならないと…大切さって気づかないものなのね…」
諦めたような笑みをふっとこぼすと、博士の家を振り返った。

予定通り、四時四十分に学校に着いた。
階段を上り、屋上への、錆付いた扉を押す。
沈みかけの太陽が投げかける断末魔が、灰原を緋色に染める。

お菓子の袋や、潰れた紙パックが転がった屋上。
くすんだ青色のはずのベンチも、今は何色だか分からない。
そのベンチに、持ってきた白い封筒を載せ、腕時計も外してその上に置いた。

…封筒の中に、今までのことは全て書き記した。
ＦＢＩの証人保護プログラムを使って、みんなを組織の手から護るよう頼む事も忘れずに。
五時になったら、何も知らない彼が来て、その封筒を手に取るだろう。

四時五十分を、緋色になった文字盤がベンチの上で示す。

「今までありがとう…工藤君…」
ふっと優しい表情になる。
封筒と時計に背を向け、しっかりとした足取りで歩き出した。

昼のうちにチェーンを外しておいた、安全用の金網の出入り口。
きしんだ音を響かせて、久しぶりに開かれる。

金網の外、校舎の端まで足を進め、立ち止まる。

開け放たれた扉の先に広がる、一面の夕焼け。
金網からの束縛から放たれたその世界は、自由を象徴しているかのよう。
見下ろすと、はるか下に運動場と、その周りのモルタルの部分が見えた。

……もう少しで…自由になれる…。

そう思ったとき、ポケットの低く細かい振動が、携帯電話の存在を知らせた。

手にとって、開くかどうか少し迷ったが、
「もしもし…」
なんとなく、応えることにした。

『ねえねえ、今…毛利探偵事務所の前』

危うく携帯を取り落としそうになった。

『まずは……おっと、工藤新一が走って出ていっちゃった。
でもいいや。まだ中には、帝丹高校のお姉さんがいるはずだし…。
シェリーだけ、一人で逝かせるのは可哀相だから、お友達も連れて行ってあげるよ。
…鉛の弾をいっぱいプレゼントしてね』

睡蓮の葉のように、灰原の瞳が大きく開く。
それと同時に、一つではない視線が鋭利に体に突き刺さるのを感じた。
一瞬の間を置いて、喉に張り付いていた言葉が慌てたように飛び出

してくる。

「待って、飛び降りたりしないから…、みんなには手を出さないで！」

『最初からそう素直にしておけばよかったんだよ…。じゃあね』

切れたままの電話を握り締めたまま、その場に座り込んだ。

そのままいつまでもじっとしていたい気分だったけど、自分を鞭打つように無理矢理立ち上がらせ、金網の向こうに戻る。

軽く鈍い金属音を響かせて、扉が閉まる。

金網越しにしか見えない世界が、囚われの身の自分のようで、すぐに目を逸らした。

そのとき、屋上のドアが軋みながら開き、コナンが現れた。

…きっちり、時間通りに。

「…で？ここじゃなきゃ話せない事っつーのは？」

…もう、ここでも話せなくなったのよ…

「ここからの夕日…綺麗だと思わない？」

ベンチの上の封筒と時計を取り、呆気にとられた表情の彼を残してその場を走り去った。

コナンと目を合わせることもせず、真っ直ぐに。

第六幕　金網越しの夕焼け（後書き）

ここまで読んでくださって、どうもありがとうございます。相変わらず夕日のシーンが好きな雪場です。私が書くと一連の流れとして「世界を血に染める～」まで付いてきますが（笑）

えっと、今回初めて時間ごとに区切っての話を書いてみました。思ったより書きやすかったですけど、次の使用予定は無し…というか、そういう話あまり思いつかないんですよ。

どうでもいいことですが、私の中で学校の屋上は学校の中でもかなり好きな場所に入ります。ほとんど行ったことはありませんが（苦笑）でも、行ったことが無いから好きなのかもしれませんね。次回は、少し登場人物が増える予定です。それでは。

第七幕　白と黒

空を侵食する高層ビル、絶え間なく行き交う人と車の奔流。
聳え立つ１０９を臨む交差点に灰原は久方ぶりに立っていた。
相変わらずの雑踏。横断歩道を挟んだ向かい側も同じ状況のようだった。
道路の対岸を眺めていた灰原の目が一人の人物で留まる。
両隣を背の高い若者に挟まれているせいか、一際小さく見える老婦人。
手押し車に包装紙に包まれた荷物を山積みにし、しきりに周りを見回している。

やがて、信号が青になり、人の群れが流れ始める。
当然のごとく灰原とその老婦人との距離も詰まっていき、すれ違いかける。
そのとき、急に荷物の山がバランスを崩し、紙箱独特の軽い音を立てて地面に転がった。

一瞬だけ周りが静かになり、また何事もなかったかのように元の雑踏へと戻る。

灰原もほんの少しの間立ち止まったが、徐に足元に転がった箱の一つを手に取ると、
「お婆ちゃん、大丈夫？」
老婦人を手伝うことに決めた。

「どうも、ありがとうね」

何度も腰を曲げてお礼を言う老婦人に別れを告げ、小走りで点滅の始まった横断歩道を渡りきった。
そのまま目の前のデパートに駆け込むと、向きかも確かめずエレベーターに飛び乗った。
動き出した鋼鉄の箱の中、一人である事を確かめてポケットから小さな紙片を取りだす。

やはり貴女には、有り難くない従者が付き添っているようです
彼の後を追うことにします。くれぐれも御身にお気をつけて

内容を確認して、すぐにまたポケットに突っ込み、小さく呟いた。
「相変わらず、見事な変装ね」

彼女が気障な怪盗と再会したのは、数日前に遡る。
ちょうど、自分での行動手段を奪われたあの日の夜。
眠ることもできず、一人ベッドに腰掛けたまま、薄いカーテン越しの漆黒の闇を見つめていた。
急に外が白くなったかと思うと、音もなくカーテンが開いた。
「お久しぶりです、お嬢さん」
真っ白なタキシードとシルクハットに身を包んだ、月下の奇術師が立っていた。
「困っている淑女を見過ごすのは、性に合わないものですから」
「どうして、私が困っていると思ったのかしら？」
「下見を兼ねて昼間飛んでいましたら、貴女が屋上の…手すりの外に佇んでいるのを目にかけましたのでね」
してやったりという風に口元がニッと笑うのが見えた。
同時に、灰原は小さくため息をつく。
「それでも、あなたには関係のないこと。知らないほうがいいわ」

「知るなと言われると、余計に知りたくなるたちでしてね」
「…あなたの命も、狙われることになるのよ」
「職業柄、そういう危険には慣れてますのでご心配なく」
諦めたように、わざとらしく大きなため息をついた。
「…私の負けね。いいわ、教えてあげる。その代わり…どうなっても知らないわよ」

そうして、彼に全てを打ち明けた。
最後まで表情一つ変えずに聞いていた彼が、話が終わると開口一番、
「もし…貴女が言ったような組織なら、こんな時間をかけるやり方は似合わないと思いませんか？」
「そう言われればそうね…。私ぐらいの研究者なら、いくらでもいるのに…」
「まあとりあえず、貴女を見張っている人物とやらを拝ませていただくとしましょう」

そう言って彼が持ち出したのがこの計画。
米花町から渋谷まで連れ出して、見張ってるやつを見つける…。
誰もいないエレベーターの中で、灰原の口元がふっと緩む。
「お人好しね…まるで誰かさんみたい」
自分がどうする気か知ったら、あの気障な怪盗は何も教えてはくれないだろう…そう思いながら。

第七幕　白と黒（後書き）

とりあえず舞台も中盤になってまいりました。ここまで読んでくださった人、そして感想、評価を下さった方、どうもありがとうございます。

ええっと、この「堕罪」のサブタイトルは、ほとんどが「色」を中心にしているわけですが、今回は「白と黒」。推理小説が好きな方はピンと来るかもしれません。そうです、横溝正史氏の小説から取らせていただきました。
ただ、この「堕罪」の中では、キッドの『白』と組織の『黒』というニュアンスで付けました。

あとは…最初の交差点、私の中ではスクランブル交差点になってます（苦笑）
どうも地元に無いものを求める傾向があるようです「無いものねだり」でしょうか？（笑）

申し訳ありませんが、次回は諸事情で一日遅れて六日になりそうです。それでは。

第八幕　黄緑の公衆電話

再び奇術師が窓辺に降り立ったのは翌日のこと。
型通りの慇懃な挨拶を済ませ、少し真剣な口調になる。
「この束縛から脱出するチャンスは一度だけ…。１５日の夜、ここの盗聴装置や監視カメラをダウンさせますから、その間に手を打ってください。心配は要りません、怪盗に過信は禁物ですが…、今回ばかりはどうやら、相手は一人のようですから」
マントをひらめかせ、灰原に背を向けると再び外へ向かって歩き出す。

「ちょっと…、組織のことは？相手は一人って、居場所も分かってるんでしょう？」
慌てたように問う灰原に、振り向く代わりに片手を挙げる。
「貴女は私の大切な宝石…。宝石はむやみな詮索をするものじゃありませんよ、お嬢さん」
パチンと指を鳴らし、彼は闇夜へと飛び立った。

「ばれてたのね…。さすがは怪盗さん」
彼は全てお見通し…相手の居場所がどこか分かったら、一人でけりを付けようと思っていたことも。
送られてきたＳ＆Ｗと共に、もうこの戯曲を終わらせようと。
でも…計画倒れ。

私が独りで取れる手段は、全て封じられて、
自分の生命さえも、もう自分のものではなくなって、
彼が何とかしてくれるのを、ただ座って待つことしか出来ない私。

そんな私が末端とはいえ、あの組織に一人で突っ込もうと考えてたなんて、別の世界の出来事みたい…。

「大切な宝石…ね」

誰もいなくなった室内で、ポツンと呟いてみる。

身動き一つ取れないように、雁字搦めにされた…石のような存在。

少し自嘲気味な色を浮かべた瞳で、壁のカレンダーに眼を向ける。

一番左の列に、赤い字で記されたその日付。

１５の数字とともに、その上の８も否応なく目に飛び込んでくる。

８日、それは彼女が新たな希望の光と邂逅した日。

…そして、禍々しいコールが最後に遭った日。

その日から、何故か渡された携帯は沈黙を保ったまま。

後で考えてみると、何も連絡がないのをもっと気にかけるべきだったと思うけど、そのときはそんなこと、思いもよらなかった。

約束の日を明後日に控えた夕方、人目に付かないよう灰原は静かに家を出た。

途中何度も何度も後ろを振り返り、米花公園脇の電話ボックスに飛び込む。

家の電話はほぼ確実に盗聴されている、携帯電話の電波に載せるなんか問題外。

前に教えられた番号を、わざとゆっくりと押してゆく。

まるで、そうしている間に掛ける必要が無くなるのを望んでいるかのように。

それでも、たった１１桁の番号。
あっという間に呼び出し音に変わり、数える間もなく相手が電話口に出た。
「もしもし？」
聞こえたのは、いつも通り変にアクセントを付けた、妙な日本語。
“その間に手を打ってください”――その言葉の示す、唯一の行動。
「１５日に、どうしても相談したいことがあるんですけど」
証人保護プログラムのことを切り出すのは、当日でもかまわないはず…。

時間と待ち合わせ場所を決め、黄緑色の受話器を下ろす。
ガチャンという大きな音と共に吐き出された、テレホンカードを取ろうと手を伸ばした。
その刹那、またポケットが震える。
久しぶりの感覚。完璧なまでのタイミングに、驚きさえ覚えなかった。

頭の中が真っ白なまま、吸い付けられるように押した通話ボタン。
『決行の日付、１５日にしようか』

それから先はもう何を言っていたかも憶えてなく、
電話ボックスの中で携帯電話を使うなんて可笑しいわね…
気がつけば、切れた携帯を片手に何故かそんなことを考えている自分がいた。

第八幕　黄緑の公衆電話（後書き）

更新がペースより一日遅れました（前回お伝えしたとおり）。ただ、次回からは再び2日ごとを貫くつもりです。
電話ボックス…最近減りましたね。ここんところ使った記憶もあまりありませんし。野球部時代は頻繁に使っていましたが…（遠い目）
あと、蛇足ですが、灰原が電話を掛けた相手は…あの変なイントネーションをした、ゲーマーの英語教師です（笑）。説明がやや不十分だったかもしれませんので、念のため。

第九幕 “Sherry”

一晩中、ベッドの上に座り込んで、部屋の奥を見つめていた。
暗闇の中がずっと続いた後、カーテンの隙間から差し込む金色の筋が、部屋に薄明かりをもたらす。

いつもと同じに見える、その日の夜明け。
けれども今日は、朝の光が部屋に満ちていく程に、絶望の黒い影がずしっとその重さを増してゆく。
抵抗を諦めた、寂しげな目を、机の上の電子時計に向ける。
ひょっとして…、そんな淡い望みを一笑するように、無慈悲なデジタル時計は15日を正確に表示している。

もう…全てが終わった。
微かな希望の光も、すぐに組織に看破されて…。
私たちの期待を嘲笑うかのように告げられた、『決行日』。
後は…やるしか…ない…。

お姉ちゃんを失ったとき、私にとって守るべきものはなくなった。
だからこそ、組織に刃向かうことも、APTXを飲むこともためらわなかった。
あのころの私なら、一人の人間を撃ち殺すぐらい、なんでもなかったかもしれない。
ましてや、ほとんど見ず知らずの人間だったのだから…。
でも…もうそうじゃない。

いつも守られっぱなしの私が、初めて守りたいと思った。
だけれども、その気持ちは、私を縛り上げる枷。
なにも出来ないまま…。失うことを怖れるあまり…。

「守るべきものがあるということが、人をこんなにも弱くするなんてね…」
彼とは、所詮全く正反対の人間なのだ、そう思えて、諦めたような笑みが浮かぶ。

「でも…もう仕方ないの…」
ベッド横の引き出しを開け、スミス&ウェッソンの冷たい身体を取り上げる。
弾倉を開き、３８スペシャルを一発だけ詰める。

勢いよく弾倉を回転させ、自分のこめかみに銃口を押し当てた。
眠るように静かに目を閉じる。
微かに震える指で、重いトリガーを引いた。

――カチッ

撃鉄が上がる乾いた音が響き、再び朝の静寂が戻る。
何事もないような、いつもと変わらない朝。
アルバート・アインシュタインは、『神はサイコロを振らない』と

言った。
もしそれが真実なら、これが正しいこと…？
「これで…。“灰原　哀”は死んだのよ…」
今の自分は、もう“ｓｈｅｒｒｙ”。
だけれども、呟く声はなぜだか震え、目頭は耐えられないほど熱くなっていた。

第九幕　“Ｓｈｅｒｒｙ”（後書き）

五幕のＳ＆Ｗのときに、オートマのコルトをやめた理由がようやく登場です。
…そうです、ロシアンルーレットがやりたかっただけ（苦笑）
弾を一発込めて弾倉回して…一回入れてみたかったので。
リボルバーじゃなきゃ出来ない芸当ですからねぇ。
蛇足を一つ。アインシュタインの台詞、「神はサイコロ遊びをしない」が正しい、との話もありますが、話の流れから有名な方を使用しました。

さて、ここまで読んでくださった皆様、どうもありがとうございました。もうしばらく、この駄文とお付き合いしていただけると幸いです。

第十幕　二重奏

――ピンポーン

苛立つように三回目のチャイムがなり終わった後、玄関の戸を開く音がした。

「灰原ー、いねーのか？」

彼の大きな声と共に無遠慮な足音が響いて、リビングのドアが開いた。

「なんだ灰原、いるなら返事ぐらい…！」

不満顔で何か言いかけた彼の額に、

「ごめんなさいね、工藤君」

作った無表情で、３８口径の冷たい銃口を押し当てた。

『どうしたの、シェリー。早く引き金を引いてよ』

携帯電話に取り付けたイヤホンを通して、機械越しの声が急かす。

そして、その声とは別に聞こえたのは、

「…撃てよ、灰原」

…えっ…

「奴らにばれたんだろ？そうなっちゃ、遅かれ早かれこうなる運命だ。
おめーだけでも助かるんなら、オレはおめーに撃たれてもかまわねーぜ」
諦めたような、淡々とした響き。
それでいて、果てしなく力強いその口調。
今まで、何度となく救われた、温かいものが流れた声。
…それが…あなたの強さ…

頭に銃口を向けたまま、思わず二、三歩後ずさりする。

『ねえ、早く』

「早く…撃てよ」

その二つの声が、
世界中の全てから急かされてるように聞こえて、
灰原は、堅く目をつぶった。

――ドンッ――

思っていたよりも大きい重く響いた銃声と、空薬莢が床に落ちる乾いた音。

体を支えていた糸が切れたように、その場に崩れ落ちる灰原。
その拍子に携帯からイヤホンが外れ、あの声が直接、閑とした室内に響き渡る。

『外しちゃったね…。しょうがないなぁ、シェリーは…。
やっぱり、直に消してあげないとだめなんだね』

第十幕　二重奏（後書き）

そろそろ話も大詰めを迎えてきましたね～。いつこの話を思いついたかなんてもう記憶には無くて、ただ半年ぐらい楽しみながら書いてた事を思い出します（ラストまで書き終えてから連載を始めるものの）。

細かい逸話は最終回のあとがきにでも書こうかな、とは思ってますが（気が向けば（おい））

ここまで書くことが面白いと思ったこともなかったですね。そういう意味では（文の巧拙は別にして）自分でも気に入っている作品です。

今後の展開も含めて、最後まで読んでいただけると幸いです。それでは、また二日後に。

第十一幕　漆黒の銃口

彼の仕事も、ようやく大詰めを迎えようとしていた。
半分ほどになった琥珀色のビンの中味を、カットグラスに注ぐ。

「工藤新一を片付けて、シェリーを連れ戻す…か」
ここ数年間で最大の失態と言われたＡＰＴＸに関する一連の不始末を完全に処理する…
「どう低く見積もっても、あのジンよりは上に行けるな」
苦々しげに“ジン”の名前を口にすると、その苦味をすすぐ様に一気にグラスを空ける。

今まで、これと言った失策を犯したこともない。
与えられた任務は、十二分にやってきた。
それでいて…組織での地位は常に奴の下。
嫌な顔一つせずに、奴の下命を拝さなければならなかった。

しかし、そんな生活とも、もうおさらば。
最悪シェリーの首から下が無くたって、“あの方”は気にはなさらないだろう。
“ジン”が半年掛かっても挙げられなかった“シェリー”を、この手で…。

こみ上げる微笑を抑えることも無く、もう一度グラスにブランデーを注ぐ。
米花町に在る、とあるアパートの一室。
うらぶれた外観とは不釣合いに、モニター等の機具が並んだ部屋の

中に男はいた。
１５日。ようやく訪れたその日は、彼の輝かしい躍進の始まりとなるはずだった。
盗聴器から拾われてくる物音と隠しカメラからの映像が、シェリーの様子を手に取るように知らせてくれる。
そうして、自分は変声機を使い、目の前にあるマイクから指令を飛ばす。
『どうしたの、シェリー。早く引き金を引いてよ』
すぐそこまで来ている歓喜の瞬間が待ちきれず、再びグラスに手が伸びる。
「早く…撃つんだ…」
グラスが空になったとき、待ちかねた音がスピーカーから流れる。
『――ドンッ――』
「やった…」
思わず握り締めた手からグラスが滑り落ち、床に当たって砕け散った。
しかし飛び散った破片には目もくれず、凝視するのはモニターだけ。
「ちっ、外したか」
モニターから見えるコナンの額には傷一つなく、
代わりに横の壁に生々しい弾痕が残っていた。
そこまで確認したとき、急に画面が乱れ、ふっと真っ暗になる。

盗聴器のほうも激しいノイズが一瞬したかと思うと、沈黙した。

「電波までいかれやがって…」

イラつきながらも、マイクを使うときに声を変えることは忘れない。

『外しちゃったね…。しょうがないな、シェリーは…。

やっぱり、直に消してあげないとだめなんだね』

あらかじめ決めていた台詞を吐くと、次の準備のため、引き出しに手をかけた。

でも彼は気づいていなかった…マイクの電源が入りっぱなしになっていることに。

「さすがは、ジンの惚れた女。組織からは逃げ出すわ、肝心なところで弾は外すわ…」

愚痴をこぼしながら、引き出しの中に手を入れた、その時、

「誰の…惚れた女だって」

後頭部に冷たく丸いものが押し当てられた。

第十一幕　漆黒の銃口（後書き）

久しぶりに組織を書きました…どうもあの雰囲気が出せないので普段は書かないのですが。新しくオリキャラで組織の方が出ていらっしゃいますが（無駄に敬語（笑））設定上特に名前は決めていません。哀嬢メインの話ですし、名前が必要な訳でもありませんし…。（実際はネーミングセンスの無さを隠す苦肉の策だったり（苦笑））それでは、次の最終話をどうぞ。

最終幕　終焉

「…ジ…ジン…！？」
ビクッとするほどの戦慄に、無意識に両手が挙がる。
「兄貴、コイツ、なんかやからしたんですかい？」
玄関で見張っているのだろうか、遠くでウォッカの声もする。
「勝手な行動は慎めと言ったはずだ…」
「は、早まるな、ジン。お前の追っているシェリー、奴の隠れ家も…。そうだ、引き出しの中に、映像や音声も保存してある！」
もうこうなったら出世だとかどうこう言ってられない。
相手がジンであろうと、とりあえずあれを渡せば…！
机の一番下の引き出し。その中に間違いなく全てしまった筈だった。
それが…中のファイルを全てひっくり返しても…
文字通り、跡形もなく、なくなっている…。
「そんな馬鹿な！確かにここに…！」
そこまで言い、再び後頭部に感じた冷たい銃口の感覚に思わず言いかけた言葉が凍る。
「ま、待て、オレを殺すと、シェリーの居場所も、分からなくなるぞ…！」
「お前にいい事を教えてやる…」
ジンの空いた方の手が伸び、机の上の宮野志保の写真を取って、ポ

ケットにねじ込んだ。
「まず、お前にシェリーの名を口にする資格はない」
「そしてもう一つ…」
「ピスコもあの世へ行く前に、お前と同じ台詞を言った」

――――ドンッ――――

一連の出来事の後…携帯から響いた、一発の銃声。
突然の幕引きを告げる鐘の音のようなその音に、今まで止まっていた想いが動き出す。
自分たちが今まで翻弄されていたものは、一発の銃声で終わってしまう一人の気紛れ。
そんな、彼らにとっては切り捨てても痛くないような一片でさえ、破滅へと導くのには充分だった。
そう、それが組織…。
「もう全部…終わったのね…」
「ああ…。見ろよ」

指差した先には、いつの間にか部屋の隅に現れた、白い段ボール箱。
側面には、気障な怪盗のトレードマーク、白いシルクハットとモノクルをつけた丸い顔の絵が描かれている。
中味はきっと…悪夢の残骸。

「またあいつに、借りができちまったみてーだな…」

いままでと何も変わらない、彼の言葉を聞いて、
ようやく、蜘蛛の糸から逃れられたのだとわかって、
張り詰めていた心の琴線が、プツンと音を立てて切れた。

「ごめんなさい…」
押し寄せてくる嗚咽に、声にならない声で呟く。
コナンは、黙ったまま灰原の赤みがかった髪を、優しく撫でる。

裏切ろうとしたのに、銃口をその額に向けたのに、
それなのに、どうして貴方は…

ねえ、どうして…

二人は舞台の真ん中に、黄昏に染まったまま、留まり続けた。

幕が下り、ライトが消えた、その後でも———

N
S

S
F
I

最終幕　終焉（後書き）

どうも、改めまして雪場です。無事に完結することが出来ました。ここまで読んでくださった皆様、感想＆評価を寄せてくださった皆様、本当にありがとうございました。

「灰原がコナンを撃つシーンが書きたい」という思い付きから始まって、屋上の話では始めて時間ごとに話が進む書き方をとってみたり、リボルバーの下調べのためにウィキペディアに走ったり…珍しくスムーズに執筆が進んだのも、灰原のキャラのお蔭でしょう。一人にスポットライトを当てて書く書き方も、ありだということも分かりました。

書いていく中で多くのことを発見しましたし、読者数や皆様の感想に、ずいぶんと励まされました。本当にありがとうございます。

ちなみに…次の長編も執筆に入っています。タイトルは、「天使が舞い降りて」。

ただ、ちょっとクセのある話なので、最初に注意をいれると思います。

それでは、今後とも、どうぞよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7318a/

堕罪　～Ｃｏｒｒｕｐｔｉｏｎ～

2010年10月10日13時12分発行